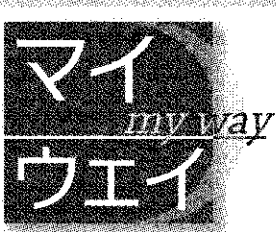


米 国 留 学

教会での仕事は半年で終わり、在学中から決定されていた学位取得のための留学で、1976年の秋からアメリカ合衆国の首都、ワシントンのカトリック大学(The Catholic University of America)で教育課程論の修士課程に入学した。



南山大学学長 ミカエル・カルマノ 24

一緒に勉強していたのは、現役の教員で、私だけがほとんど(キャリアアップ(恵方町教会の任務を除く)のために修士号を目指す) いて) ずっと学生の身分

“好都合の分野”にチャレンジ



ホワイトハウス前で

で、働いた経験、まして教職の経験を持っていなかった。しかも、専攻分野となっていた「Curriculum Theory」(教育課程論)についての予備知識は、南山大学の(当時の)教育学科の教員がくれた教科書(「教育学全集4、教授と学習」、小学館、1975年増補版)から得た情報だけであつた。今も大学の研究室で大事に保管しているが、余白に書き込まれた鉛筆書きの英語の単語や専門語の説明の痕跡を見ると、大学院1年生の時に感じた不安を思い出す。しかし、このような状況はすべてが私の力不足を反映するものではないと思つた。そのきっかけは、各教科書が導入で展開する「教育課程論」という専攻分では何を研究するのか」という見解を比較したことであつた。私が見たところ、20世紀初頭に教育学の一分野として認識されるようになった教育課程論がいったい何を指して、何を研究するかという点について統一した見解は見られなかった。幅広くなることを横断的に勉強することが好きな私にとつて好都合の分野だとして嬉しくなつた。ワシントンと言えば、アメリカ議会図書館や国立航空宇宙博物館も良い学び場として印象に残っている。焼かれ破壊された建物が輪のように残っていた姿は、この都市に対する非常に対照的なイメージを私に与えた。また請われて、時々やつた日曜日の教会の手伝いもおもしろい思い出になった。ある時、友達に変わってアメリカ空軍基地にあるチャペルでミサをあげることにした。神父の格好をして自動車で正門に近づくと、番兵は直ちに遮断棒を上げ、帽子に手を当てた。この挨拶をどう解釈すればよいのか、少しだけ迷いを感じたのを憶えている。